

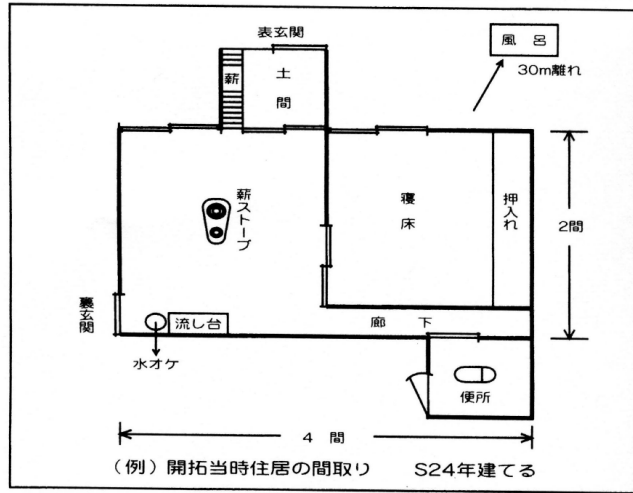
(略) 富丘における戦後開拓は昭和22年頃から始まり…18人の方々が入植…。…佐藤・柳谷は家を建てることになり、骨組みは生木を切って縄で縛り、壁は皮板を釘で留めて貼った。そのすき間に粘土を貼り付け、屋根はかや葺きとしていた。

…矢野定芳の話によると、当時の家は、床に厚さ15センチほどにエン麦殻を敷き詰め、ムシロを敷いて、さらにワラ(エン麦殻)布団の上に寝た。寝返りすると中のワラが片寄ってしまった、寝る前に直すのが日課だった。飲み水は20メートルほど離れた小川から天秤棒で担いで水桶に運ぶのが大変な思い出として残っている。風呂の水は井戸から1時間ほどかかって汲み上げ、冬期は10時頃から火をつけて3時頃までに入った。雪を入れて足し水とした。

…戦後の混乱した状況下で、国民全体が食糧難で困窮した生活が一般的だったが、開拓者の生活はさらに大変な思いをしている。

開拓者が家を建てる場合、水源を探して建てている。井戸から風呂に水を汲み入れる時はじょうずな人でも1時間ほどかかり、冬は外風呂なので風前から水を汲み、火を焚き付け、遅くとも3時頃までに入った。

食べものは麦ご飯、自家製の味噌でみそ汁、大根飯(大根に麦を入れたかゆ状)、ニシン、ホッケのみそ漬け、凍れイモのだんご、いさだの塩干し(小エビの塩漬け)、クジラ油でイモ炒め、イナキビ餅、イモ・カボチャの合わせ煮や山菜料理、大根の漬けものなど…。



開拓当時住居の間取り

「富丘百年史」掲載の戦後開拓者の住居図